

県小中学教研会報

発行 石川県小中学校教育研究会
 金沢市尾山町10番5号
 石川県文教会館内
 電話(076)262-4916

編集 石川県小中学校教育研究会
 広報部

印刷 株式会社 山 越



石川県小中学校教育研究会第3回研究大会（石川県地場産業振興センター本館）

設立三年目を迎え、「授業研究の文化」の継続・発展を



石川県小中学校教育研究会

会長 川原 弘明

八月十一日に開催いたしました石川県小中学校教育研究会第3回研究大会が、「石川の授業研究文化の継承と発展」のテーマのもと、石川県教育委員会教育長 木下司様、石川県市町教育長会会長 野口弘様をはじめ、多数のご来賓の皆様方にご臨席いただき、また、多くの会員の皆様にご参集いただき、無事終えることができました。

石川県小中学校教育研究会は、それまで培ってきた各郡市町の教育研究会、各教科等の教育研究会の「授業研究の文化」を県内全域の教職員で共有したいという強い思いで三年前の平成二十四年に設立されました。設立に際しては、さまざまなご苦労があったことと思います。そうした困難を乗り越えて本会を設立していただいた当時の役員の皆様や各教育研究会の諸先輩の皆様にご敬意を表したいと思います。また、本研究会設立をご支援いただいた石川県教育委員会に深く感謝申し上げます。

現在、本会は、主に五つの活動を行っています。

- 各郡市町教育研究会の研修活動等についての交流活動
- 教育研究会・講演会の開催
- 各教科等研究団体が開催する県や東海北陸、全国大会等研究大会の開催場所等の調整
- 各教育研究団体や個人が行う教育実践研究への支援
- 研究集録や紀要の刊行

今回の研究大会は、二つめの活動にあたります。研究大会当日の午前中には、十六の各郡市町の学校教育研究会が一堂に会して、研修活動についての報告や意見交流会が行われました。

開会式後には、三重大学教授の岡野昇先生から「子どもと教師の学びを育む学び研究」と題してご講演をいただきました。講演会後の分科会は、参加型の研究会として、昨年度募集しました「教育実践研究」十本と二つの教科等研究会の実践発表を行いました。指導方法の工夫改善など教育全般における意欲的な研究成果が発表されました。参加された会員の皆様には、自分の教科や領域にとらわれず、他教科や他の領域の実践に触れ交流していただきました。

講演や分科会の要旨等は、別紙面に掲載してありますので、ご覧ください。

この研究大会を通じて、学ばれたことを各郡市町の研究会に広めていただき、石川県の授業研究の文化が、さらに継続、発展することを期待します。そして、石川県教育委員会、石川県市町教育長会をはじめ、関係諸機関の皆様方の引き続きのご支援をお願いし、十六郡市町の教育研究会と二十四の教科等教育研究会の協力のもと、本研究会が、今後ますます発展することを願っております。

祝辞

石川県教育委員会
教育長 木下 公司

本日、石川県小中学校教育研究会第三回研究大会が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

皆様方には日頃より本県の学校教育の充実や児童生徒の健全な成長に向けた様々な取組に御尽力いただき深く感謝申し上げます。

さて急速な社会の構造変化を背景に近代工業化社会を支えてきたこれまでの教育が二十一世紀、二十二世紀に求められる人材の育成に適合するのかなど、今後の教育課程のあり方について現在中教審で審議が進められております。その経過を見ますと新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方として今後の子供たちに必要な力をどう育むのか、何を教えるかだけではなく、どのように学ぶかを教える、つまり学びの質、深まりを重視することが必要になってくるのが取り上げられております。また、課題の発見、解決に向けて、主体的、協働的に学ぶ学習のあり方、いわゆるアクティブ・ラーニングや小学校における英語の教科化をはじめとする教科、科目のあり方についても審議されているところがあります。

このような国の動きを踏まえ、

県では今年度から学力向上に向けて、学びの組織的実践推進事業や能動的学習推進事業に取り組みほか、平成三十、三十一年に全面实施される特別な教科「道徳」を見据え、いしかわ道徳教育推進事業にも全県的に取り組んでいただいているところです。これらの事業の推進校においては、今後、研究の取組や成果、課題などについて各地域、県全体に発信していただくこととなりますが、推進校の優れた取組の中から各学校で生かせる内容を選び、学力の定着、向上、また道徳性の育成に向けて大いに参考としていただきたいと思います。

こうして、本研究会は、校内の研究だけにとどまることなく、様々な地域や教科で多くの先輩方が地道に取り組み、営々と築き上げてこられた石川の授業研究文化をこれからもオール石川で一層継承発展していこうとする趣旨に基づき取り組まれており、県としても期待をしております。

今回、第三回目の研究大会を開催するということで、各地域の研究団体との幅広い交流を通して、これまで以上に充実した活発な研究協議をお願いしたいと思います。

最後になりますが、本研究会の開催にあたり、御尽力くださいました関係の皆様に対し、深く感謝を申し上げますと

に、本大会での成果が本県の小中学校教育の更なる充実、発展に生かされますことを心より御期待申し上げます。お祝いの言葉といたします。

祝辞

石川県市町教育長会
会長 野口 弘

本日ここに石川県小中学校教育研究会第三回研究大会が開催されるにあたりまして一言お祝いを申し上げます。

本研究会は、県内の教職に携わる人たちの様々な要望に応えるために四年前に誕生いたしました。それまで各地区、市、町にあった研究団体や研究会を一つにまとめたことで全県的な視野に立った研究を可能にしたわけです。誠に喜ばしく心からお祝いを申し上げます。

さて、ここに掲げてあります大会テーマは「石川県の授業研究文化の継承と発展」となっております。これは、私たちがこれまで大切に育ててきた「指導力や指導技術」といった教師にとつての財産をいかにして次の世代へ継承し、さらにそれをより高め発展させていくかということだろうと思います。

ところで、ここ数年、教職員の大規模な世代交代が進んでいます。ベテランの教師が大量に退職する一方で新規採用の若い教職員が増えています。このような状況の中で若い人たちの指

郡市町教育研究会
協議会報告

金沢市立兼六中学校
山形 正喜

県内十六郡市町教育研究会の代表者が集まり、加賀市と鹿島郡教育研究会の活動報告の後、三グループに分かれて研究協議がおこなわれた。

① 加賀市

「教科研究部」「道徳、特活、総合、外国語活動研究部」「特別支援教育研究部」「専門部」に別れ、研究会を持ち、研修に努めている。

「教科研究部」では、「いしかわ学びの指針十二か条」と関連した研究主題を定め、研究授業をおこない、指導主事や実践家を招聘してワークショップ型の研修会とすることで授業力の向上に努めている。さらに、小中合同の研修会を持つことで、小中連携して指導法の研究を進める取り組みも行っているとの報告があった。

課題として、会員数の減少からくる部会活動の制限についても報告された。

② 鹿島郡

小中合同で「教科等研究部会」と「専門研究部会」の二部会に分かれて研修会を持ち、研修に努めている。

「教科等研究部会」では、研究授業と協議による研修会など、年四回の研修会を小中合同でおこなうことで、小中の授業内容

指導法について相互理解を深めることができている。さらに、科学フェスティバルや町音楽会や町文化祭などの文化活動、水泳交歓会や器械運動交歓会などの体育活動の運営をそれぞれの研究部会が担っており、各学校の教育活動の共通性が高まり、町としての一貫性や一体感が生まれているとの報告があった。鹿島郡においても、会員数の減少からくる研修内容の検討が課題となっており、報告された。

全体協議

特別支援教育を担当する郡市町の専門機関に関する情報交換や会員数減少からくる研修会の持ち方、ブロックでの研修会の開催などについて熱心な協議がなされた。

グループ協議

大きなテーマとして、「人材育成」と「学力向上」を挙げ、特に「人材育成」を中心テーマとして協議が進められた。その内容として、



「小中連携した研修会の実践と充実」「郡市町連携した研究組織の構築」「ミドルリーダー育成のための研修会の充実」「若手人材の育成のためのOJTの充実」などについて、熱心な情報交換と協議がおこなわれた。

記念講演



『子どもと教師の学びを育む「学び研究」』
— 学びの共同体の実践から —

三重大学教授 岡野 昇

学びの共同体の実践校は現在小学校千五百校、中学校二千校、高校三百校ある。どういいう教育方法がもっとも定着するのかを表した図では、講義5%、読書一〇%、グループ学習五〇%に対して、ティーチング アザーズ（他者に伝える）は九〇%になる。この場合の他者に伝えるとは、一方的ではなく、他者のわからなさを引き出して、それに応じて伝えることである。

「ジャンプのある学び」の三つの要件を掲げ、この三つを充足する学びを追求している。

○学び合う関係
わからない生徒が前のめりになって質問する「聴き合う関係」を築くことが大切である。話し合いは全体的にやかましいが、聴き合いは静かである。聴き合う関係が「安心」と「落ち着き」を生み出す。密接距離とは一メートル以内で、くつつくほど安心して落ち着く。通常の教室では黒板から子どもの席まで三mから六、七mくらいの距離があるが、協同的学びの教室では一mから三mくらいである。つまり、学びの基盤は聴き合う関係である。一人残らず、すべての子どもに学びを保障するため、大切にしたいことは三つある。まず、教師が聴く（受け容れる）。次に聴き合う関係を丁寧に築く。最後は学びの作法の習慣化である。具体的には「ねえ、ここどうするの」で始まり、相手が納得するまで説明し、自分が納得するまで聴くことである。

学びの共同体の実践校は現在小学校千五百校、中学校二千校、高校三百校ある。どういいう教育方法がもっとも定着するのかを表した図では、講義5%、読書一〇%、グループ学習五〇%に対して、ティーチング アザーズ（他者に伝える）は九〇%になる。この場合の他者に伝えるとは、一方的ではなく、他者のわからなさを引き出して、それに応じて伝えることである。日本では三種類のグループ学習が普及している。初めは班学習という「集団学習」。次は協力学習による「話し合い」学習。そして「協同的学び」である。自己との対話、対象（モノ）との対話、他者（人）との対話の三つの対話の実践である「学びの三位一体論」における協同的学びの授業である。それには、対象が指導案や教師の活動に注目していた伝統的授業研究から子どもの学び合う関係を対象とした革新的授業研究へとパラダイムシフトしていくことが重要になってくる。子どもの学びが権利の実現、質の高い学びの創造、思慮深い教師の成長、同僚性の構築、誰もが主人公になる民主的な学校と教室を目指し、授業研究は年間三十回以上行う。

○ジャンプの課題
発達の最近接領域（学びの可能性）とは「子どもが単独で達成できる課題によって示される発達水準と大人と共同することによって達成できる課題によって示される発達水準の差を指す。」「教授（学習）はそれが発達の前を進むときにのみ良い教授である。」「子どもの実態に合わせないということ。子どもの実態をつかんだら、そのチョイ上、チョイ前を課題の設定にしてあげないと子どもは伸びない。一人でできることをやっても発達の後追い。子どもの発達を超えたところに課題を設定してあげ、そこに向かって教育する。なので子どもの発達が伸びる。」

最近の中学生はとても幼い。小学校五年生ぐらい。大学生は高校生。稚拙です。もの考える力がなくなってきたと言われている。いつも「適応していく」という教育をしていくと精神的に幼くなっていくと言われている。難しいことに挑戦させることで授業をする。「ジャンプの課題」はより本質（共有の課題・基礎）に迫り、より本質の有り難さがわかる内容を設定する。また、必ず「応用」「基礎」を保証する。できない子ほど保証すること。知識の差はあっても、思考力の差は人間にはない。ジャンプの課題は難しいと先生方から言われる。それは本質（共有の課題）でいったい何を大切にすればよいか、わからないこと、裏返しではないか。

○「教える専門家」から「学びの専門家」へ
若手三年目の発言を聞いています。三年目までの発言があがっているということは、確実に学校に力があるという証拠。三年で発言の内容が変わってきたり授業が変わっていくというのは学校の成果である。

○「真なる学び」
教科の本質とは。「社会科でしか学べないことは何なのか」「文学でしか学べないことは何なのか」「説明的な文章でしか学べないことは何なのか」それが他のことで学べたら真正とはいえない。

本質を見極めて、デザインしていく。今までの形にとらわれない授業研究をしていく。デザインとは、形にとらわれない新しい形をどう生み出していくのかということ。

そこで、二十一世紀のカリキュラムの学びの文化領域の構造化として、「言語の学び」、「探求の学び」、「アートの学び」、「市民性の学び」の四つの領域を設定してデザインしていくことに挑戦している。

また、デザインだけでなく、学びの「言語的技法」も教える。「言語的技法」には二種類ある。コミュニケーション機能（外言、話し言葉、他者対話）と思考の機能（内言、書き言葉、自己内対話）である。



教科等別研究協議会報告

第一分科会

音楽（輪島市立河原田小学校 松本美弥教諭）

「日本の音楽 小学校で挑戦！ ～思考・判断し、表現する子どもをめざして～」を研究主題として、音楽をつくり、思考・判断し、表現することを目的とし、日本の伝統音楽を、「音楽づくり」の授業で体験し、箏や三味線など本物に触れ、様々な場面で伝統音楽にチャレンジした実践であった。学びを生かし、地域に向けた活動であった。



算数（石川県算数教育研究会）

「式を豊かに読むための式の指導―第6学年 文字と式の考察―」を研究主題として、一つの式から様々な図形の面積を考える算数的活動の実践例が発表された。式は答えを出すためのものでなく、事柄や関係を一般的に表す働きがあることを、算数的活動を通してとらえさせ、式から様々な具体的な場面を考える力を身に付けさせることを目的とした実践であった。式という表現方法の有用性について考えさせられた。

情報（金沢市小中学校教育研究会 情報部会）

「確かな学力を育む『情報』の効果的な活用を追求する」とい

う主題で、言葉と映像メディアに関する指導方法が未だ明確ではないことを皮切りに、「書くこと」領域における映像メディアの指導を取り入れたパンフレットの制作で、「見ること」「見せること・つくること」に着目し、児童がどのように学んでいくかを検証した。映像メディアと言葉の関係性についての能力の獲得と学習範囲の拡張に期待できるといふ研究結果が発表された。

第二分科会

学習全般（能美市立粟生小学校 北川陽二教諭）

児童の基礎的な学力向上を図るために、①漢字学習コンテンツ、②フラッシュカードコンテンツ、③基礎学力コンテンツの三つのICTを利用した実践例が発表された。児童は意欲的に取り組み、何度も使える良さを実感し、短時間に繰り返し使うことで、基礎用語や基礎知識が定着したとい



生活（内灘町立向栗崎小学校 酒井淑江教諭）

気付きの質を高めるために、①意図的・計画的な単元計画、②「見つける・比べる・例える」などの多様な思考・表現活動の充実、③気付きの姿を評価するためにルーブリック（評価指標）の作成の三つの視点に沿って、授業実践を行い、情報交流

を活性化し気付きを生む場を工夫することで思考が深まり、気付きを自覚することができた。数学（金沢市中学校教育研究会 数学部会）

学習意欲を高め、主体性を持たせるためにアウトプット活動を取り入れた授業を行っている。①問題解決型の課題設定、②学び合う場面設定を工夫することで学習意欲を引き出し、自分の考えを発表し思考力・表現力を育てている。学習評価アンケート結果よりアウトプット活動と定着状況とに相関関係も見られ成果が上がってきている。

第三分科会

情報（金沢市立港中学校 福田正克教諭）

年度当初の時間割作成には多くの時間がかかっていた。その解決のために、「エクセルソフトを使った時間割ソフト」を作成した。

学校の実情に合わせて多様な設定ができ、時間割のコマ作成や配置を自動で行うことができる。また、時間割一覧や生徒配布用時間割が同時にでき、校務の効率化に役立つものである。



社会・生活（金沢女子社会科学部会）

自ら学び考える子をめざしての実践であった。「学校のまわりの様子」から「市の様子」へと同じ「たこむし」（建物・交

通・昔からあるもの・自然）の視点で比較することで学び方を積み上げ、社会的な見方・考え方を深めている。さらに、まともとして「金沢大好きあんなないマップ」を作成することで地域に対する愛着や誇りを持たせたことが児童の感想からもうかがえた。

図画工作（金沢市立中央小学校 福田満佐子教諭）

「心と感性・創造性をみがく『生き生き頭考（ずこ）科』をめざして鑑賞活動を通して」を研究主題に、作家や図書館司書との連携を通して鑑賞活動を追究した。鑑賞活動は作品の造形的な美しさや価値だけでなく、作者の思いや背景にある生活や時代などに触れることで、生き生きとした表現活動につながる事が分かった。

第四分科会

学習全般（金沢市立小坂小学校 山口眞希教諭）

協働学習を活性化させるツールとしてフィルムつきホワイトボードを活用した実践の報告が行われた。土台としてホワイトボードの良さに気付かせることや協働学習の進行役ファシリテーターを育てた上での実践の中で、子ども同士のコミュニケーションが増えたり、思考が可視化されたりするなどホワイトボードの有効性が明らかにされた。

国語（金沢市立戸板小学校 中野茜教諭）

自分の思いや考えを表現する力の育成をめざし、新聞記事を

生かした取り組みや単元を貫く言語活動を生かした取り組みの報告が行われた。文章を要約する力や自分の考えを書く力がついたこと、児童が見通しをもって学習に取り組めたことや前時の教科書教材での学習が並行読書材で生かされたことなど子どもたちの姿が紹介された。



理科（金沢市小中学校教育研究会 理科部会）

地学に関する児童の関心・意欲を高めるため、教師に理解してもらうため、金沢地質パネルの作成と配布、寄贈されたアンモナイトの化石板等の教材化、科学作品の手引き、チャレンジプリントの作成の取り組みが紹介された。成果として児童の理科への興味・関心の向上、基礎基本の底上げ、教師への地学分野への意識付けが報告された。

編集後記

「石川の授業研究文化の継承と発展」をテーマに、第三回研究会大会が盛会で終えることができました。

各地域の教育研究団体や教科等研究団体の取り組みを参加型形式で活発に交流し合い、意義のある会となりました。第七号の発行にあたり、たくさんの方のご協力やご支援をいただき、誠にありがとうございました。（広報部 澤 祐紀恵）